

子供が自信・誇りをもって地域で暮らしていくために
～地域の歴史・文化の伝承を再度循環させる～

裾野市 志田 千麻



1. はじめに

1.1 背景

高齢化や人口急減、頻発する自然災害、コミュニティの希薄化など、地域をとりまく課題は多様化・複雑化している。裾野市においても平成 22 年を境に人口減少局面に入り、国立社会保障・人口問題研究所の推計（平成 30 年 3 月準拠）によると、平成 27 年国勢調査での 52,737 人から令和 12 年には 47,304 人に減少するとされている。地区の役のなり手不足は深刻であり、筆者の所属する消防団も条例定数を割りこんでいる。

こうした課題には行政だけで解決できないものも多い。本市では平成 19 年度に市民協働によるまちづくり基本指針、平成 21 年度に市民協働によるまちづくり推進計画を策定し、市民協働によるまちづくりを推進してきた。平成 28 年度以降は第 4 次総合計画後期基本計画の策定にあたり計画に関わりをもつ人を増やすため「裾野市みらい会議」を開催している。計画策定後もオープンに住民が対話する場として定期開催され、住民の積極的な参画が見られる。一方で、地域に対してマイナスなイメージを抱きがちな住民も存在する。「裾野には何もない」「裾野なんて…」というセリフは、多くの大人から聞く言葉である。そうした親の言葉を聞きながら育った子供は、大人になり地域にどのような想いを抱くのだろうか。

地域に対する想いは個々により異なる。それは 0 か 100 かというものではなくグラデーションのように、何かのきっかけで変化していく可能性がある。子供達が将来地域に自信と誇りをもって暮らすためには何をすべきなのか、という疑問のもと本レポートを進める。

1.2 研究の目的と方法

「都市に対する市民の誇り」をシビックプライドと言い、その大きな源泉に郷土愛があるという（伊藤ほか 2015）。では、郷土愛つまり地域への愛着を高めるにはどうすればよいのだろうか。先行研究によると、地域への愛着は地域に対する肯定的な認知、肯定的な印象の上に育まれるという（引地ほか 2005）。図 1 は愛着が形成されるモデルを図式化したものである。愛着を形成する要素は、土地・文化・社会の三つに分けられ、相互に影響を及ぼしあいながら、直接的には社会に対する認知・印象が地域への愛着へつながるといふ。

現状は地域に対して肯定的な認知・印象を抱くことができていないことで、地域に対してマイナスイメージを抱いてしまっているのではないだろうか。生涯学習課で文化財を担当する筆者としては、三要素のうち土地・文化に関すること、特に地域の歴史や文化の面白さ、オリジナリティの認知が低いと感じる。改めて地域の歴史や文化を学び、知ることが地域への愛着形成を助長すると考える。

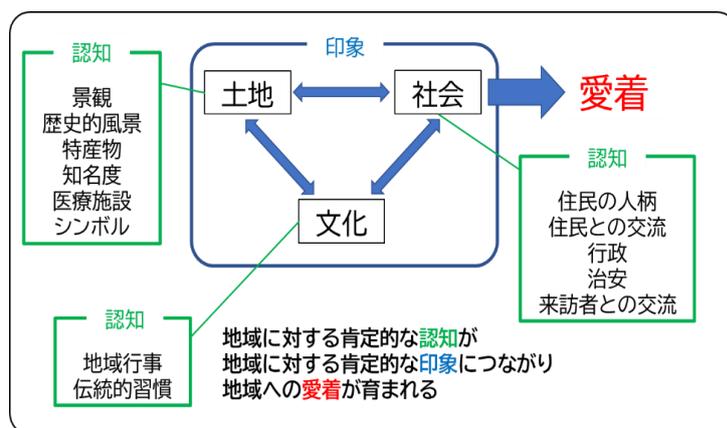


図 1 愛着の形成モデル
(出典：引地ほか (2005) の論文を参考に筆者作成)

地域を知るための実践に地元学や地域学がある。吉本哲郎は地元学を「地域の持つ人と自然の力、文化や産業の力に気づき、その地域に眠るたくさんの宝と、住民達の潜在的な能力を最大限に『引き出す』手法」だと述べている。何もないと思われている地域を違った視点で見ること、今あるものの価値に気付くことができるという。また、「大事なことは、住んでいるところを住んでいる人たちが説明できること」「調べたものしか詳しくならない」と、自ら学ぶことの重要性を説いている (吉本 2008)。

山下祐介は地域学を「自分の足元にある地域について学ぶこと」としている。そして、「足元の地域を知ることが、自分を知ることにつながる」という。地元学に比べアプローチは社会学や歴史学に寄っているが、歩き、見て、聞いたことをまとめるなど地元学との共通点も多い。地域の原型を江戸時代に置き、時間と空間を意識した実践がされている (山下 2020)。地元学・地域学とも、足元を調べ、知るという取組である。それにより日頃見ているように見ていなかったまちの景色にひそむ歴史的・文化的意味にも気付く事ができる。

本レポートでは、住民が地域へ自信や誇りをもちながら暮らすための方法を明らかにすることを最終目標とする。そのために、地元学、地域学の手法を取り入れながら、住民が自ら地域の歴史や文化を学び、地域への愛着を育むプロセスを検討することを目的とする。当市のもつ歴史的背景や住民へのヒアリングから住民が地域を知らなくなった背景を探るとともに、筆者の行った実践事例とその分析から、地域へ自信や誇りをもつために必要な具体的なアクションを検討する。

1.3 構成

本レポートの構成は以下のとおりである。まず、第 2 章では当市の概要や歴史的背景を紹介したのち、研究の目的に対する現状と課題を明らかにし、分析の枠組みを提示する。第 3 章では住民が地域の事を知らなくなった理由を社会的背景から検討するとともに地域住民へのヒアリングにより検証し、地域を知るための手段として地元学や地域学の手法を用いながら、特に地域の歴史や文化に焦点を当てた実践と分析を行う。第 4 章のまとめを受け、第 5 章で提言を行う。

2. 概要

2.1 裾野市の概要

裾野市は静岡県東部、富士山の裾野に位置し、箱根外輪山、愛鷹連山に囲まれた自然あふれるまちである。人口は 50,499 人（令和 3 年 12 月現在）、面積は 138.12 km²、標高は 78.5 m から 2,169m と起伏に富んだ地形を有する。江戸時代には現在の市域に 24 の村が存在したが、明治 22 年の市制・町村制の施行に伴い、泉村・小泉村・深良村・富岡村・須山村の 5 カ村が誕生した。その後、昭和の大合併で 5 カ村が順次合併し、昭和 32 年に現在の市域が確立された。旧 5 カ村の村域は現在も中学校区として残っている。



図 2 裾野市の位置

（出典：裾野市公式ウェブサイト）

愛鷹・箱根山麓を除く土地の多くは富士山の溶岩上にあり、溶岩流により形作られた滝や洞窟など多くの文化財が点在する。縄文、古代、中世の遺跡も多く、古くから人々が生活していた。一方で弥生時代の遺跡は非常に少ない。これは約 2,300 年前に発生した富士山の山体崩壊に起因する土石流が市域の平地を襲い、土地が稲作に適さなくなったためと考えられている。

戦後までは地方の一寒村だったが、昭和 35 年施行の工場設置奨励条例により世界的企業の工場や研究所が立地し、産業の中心は農業から工業へと大きく変化した。昨今はトヨタグループのウーブン・プラネット・ホールディングス株式会社による実証実験都市「ウーブン・シティ」が話題となっている。

2.2 現状と課題

2.2.1 住民の地域への愛着

毎年度実施している市民意識調査の結果を近隣自治体と比較し、住民の地域への愛着を相対的に確認する。なお、当市の質問形式に経年による差があることから、年度により比較する自治体を変えた。

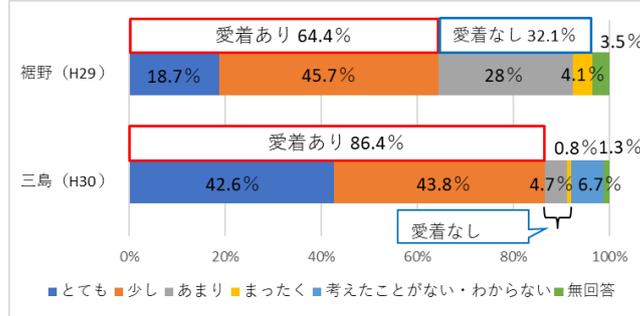
①三島市との比較

平成 29 年度裾野市市民意識調査と平成 30 年度三島市市民意識調査では、地域への愛着に関する質問を行っている。

肯定的な回答をしたグループを見ると「とても感じる」は裾野市 18.7%、三島市 42.6% と 2 倍以上の差がある。「少し感じる」の回答に大きな差はない。否定的な回答をしたグル

ープを見ると「あまり感じない」は裾野市 28%、三島市 4.7%と 6 倍近い差が見られる。「まったく感じない」は裾野市 4.1%、三島市 0.8%となっている。

表 1 裾野市・三島市の地域への愛着比較



(平成 29 年度裾野市市民意識調査報告書及び
平成 30 年度三島市市民意識調査報告書より筆者作成)

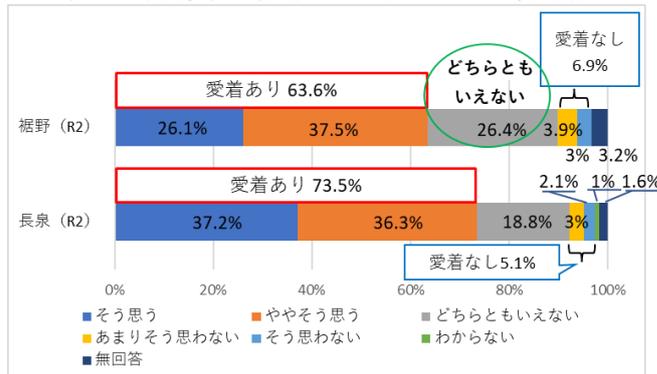
三島市との比較では、弱いながらも愛着を感じる層に大きな差は無いが強く愛着を感じる層が少なく、一方で愛着を感じない層が多いことが分かる。

②長泉町との比較

令和 2 年度裾野市市民意識と長泉町住民意識調査では、地域に対して愛着を感じるか、という質問を行っている。

肯定的な回答をしたグループを見ると「そう思う」は裾野市 26.1%、長泉町 37.2%と 1.4 倍以上の開きがある。「ややそう思う」の回答に大きな差はない。次に、「どちらともいえない」の回答は裾野市 26.4%、長泉町 18.8%と、裾野市が 1.4 倍となっている。否定的な回答をしたグループを見ると「あまりそう思わない」は裾野市 3.9%、長泉町市 3%、「そう思わない」は裾野市 3%、長泉町 2.1%となっている。長泉町との比較でも、三島市との比較と同様の傾向があることが分かる。

表 2 裾野市・長泉町の地域への愛着比較



(令和 2 年度裾野市市民意識調査報告書及び
令和 2 年度長泉町住民意識調査報告書より筆者作成)

以上から、住民の地域に対する感情を近隣自治体と比較すると、強く愛着を抱く層が少ないこと、少し感じる・あまり感じない・どちらともいえないといった中途半端な層が多いことが分かる。

また、当市の調査を比較すると、肯定的な回答をしたグループは平成 29 年度 64.4%、令和 2 年度 63.6%と大きな差はない。令和 2 年度調査で「どちらともいえない」と回答した層は、平成 29 年度調査では愛着が無いと回答したグループに流れていることが想定される。この層にアプローチし、愛着を抱くきっかけを作ることができれば現状を改善することができるのではないだろうか。

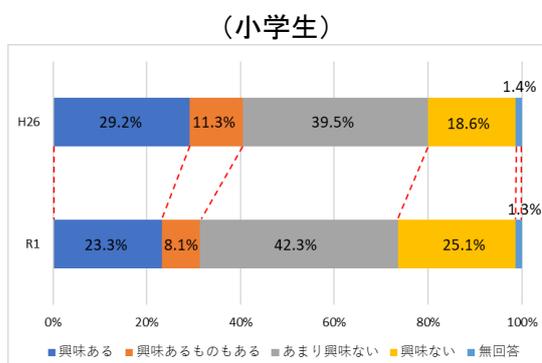
2.2.2 地域の歴史や文化への興味

地域の歴史や文化への興味について、平成 26 年度と令和元年度に実施された裾野市教育に関するアンケートの結果を経年で比較する。

小学生では、平成 26 年度に 29.2%だった「興味ある」の回答が令和元年度には 23.3%に、「興味あるものもある」の回答が同じく 11.3%から 8.1%に低下した。また、「あまり興味ない」の回答は横ばいだが、「興味ない」の回答は 18.6%から 25.1%へ増加しており、全体的に興味は低くなっていることが分かる。

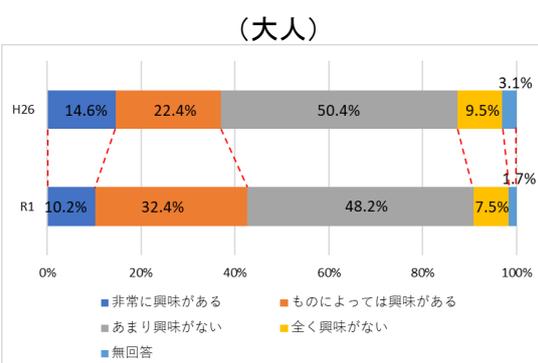
一方、大人では、平成 26 年度に 14.6%だった「非常に興味がある」の回答が令和元年度には 10.2%に低下したものの、「ものによっては興味がある」の回答は 22.4%から 32.4%へ 10 ポイント増加している。「あまり興味がない」「全く興味がない」の回答はそれぞれ微減であり、全体的には興味をもっている層が増えていることが分かる。

表 3 地域の歴史や文化についての興味



(平成 26 年度及び令和元年度裾野市教育に関するアンケート調査報告書より筆者作成)

表 4 郷土の歴史や文化への興味



(平成 26 年度及び令和元年度裾野市教育に関するアンケート調査報告書より筆者作成)

しかし、大人に対して行った指定文化財の認知度調査では、須山浅間神社（平成 26 年度 57.4%→令和元年度 54.6%）、旧植松家住宅（同 53.2%→61.2%）、葛山城址（同 47.9%→41.3%）、定輪寺と宗祇の墓所（同 38.7%→30.2%）と、一部を除き低下している。また、知っているものはないとの回答は 6.7%から 7.8%に増加している。

以上から、地域の歴史や文化への興味は子供において低下しており、大人においては興味をもっている層が増えている反面、個別の指定文化財の認知度は低下していることが分かった。現状は住民が地域の歴史や文化を知らなくなりつつあると言える。図 1 のモデルに照らすと、土地・文化に対する肯定的な認知・印象がもてていないということであり、住民の

地域に対する愛着が低い要因の一つと考えられる。

2.3 分析の枠組み

以上を踏まえ本レポートでは、住民が地域の歴史や文化を知らなくなりつつあるという問題の理由を社会背景やヒアリングを通じ考察し対策を検討する。それとともに、地域の歴史や文化を改めて伝えるという課題を達成するため子供を対象とした取組を行い、その際のアンケート調査から歴史や文化を改めて知ることが地域への愛着につながるかを検証する。

3. 地域における歴史や文化の伝承についての分析

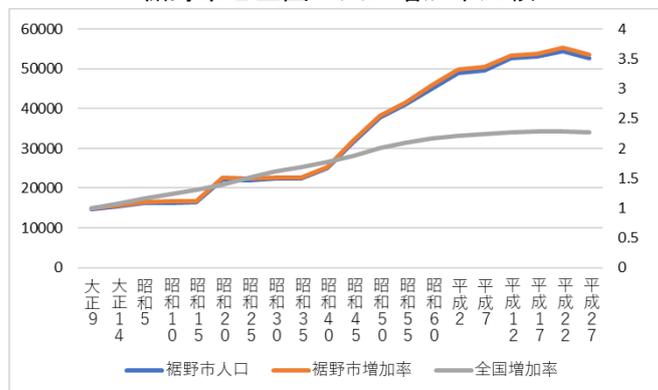
3.1 地域を知らない理由

山下は地域学を、かつてはみんなが当たり前知っていた地域の認識方法だという。それが近代化やグローバル化により「多くの人々が家や地域から離れてしまい、『地域のある空間』や『家が続いていく時間』をもたなくなった」ため「放っておいては習得できないもの」になったと述べている。それを踏まえた上で当市の歴史を加味し、住民が地域の歴史や文化を知らなくなりつつある理由を二点提示する。

一点目は急速な工業化である。戦後までは農業中心であった当市の産業構造は昭和 30 年代以降に急速に工業化し、農家の兼業化が進行した。地域外や市外に勤めに出る住民も増え、山下の言う家や地域から離れた住民が急増した。その結果、地域の歴史や文化を古いものとして排除し、次世代に伝承しなくなったのではないだろうか。

二点目は新住民の流入である。急速な工業化は新住民の流入をもたらし、市内では多くのニュータウンが造成された。表 5 は当市の人口推移と、大正 9 年を 1 としたときの裾野市と全国の人口増加率をみたグラフである。当市の人口は昭和 40 年代以降、全国平均と比べ大きな伸び率を示している。新住民の流入は当市にとってプラス要素ではあったが、地域の歴史や文化がうまく伝承されなかったことが想定される。

表 5 裾野市の人口の増加および
裾野市と全国の人口増加率比較



(国勢調査をもとに筆者作成)

そこで、「地域の歴史や文化を古いものとして伝承していない」「新住民の流入により地域

の歴史や文化が引き継がれていない」という観点から地域住民へのヒアリングを行った。

3.2 地域住民へのヒアリング

3.2.1 Sさん（70代男性、生まれ・育ちともに裾野市茶畑）

「子供の頃は兄弟や近所の子供達と遊んだ。農家の編んだ縄で縄跳びをし、夏には川で泳いだ。夏休みには神社に泊まることもあった。川でもじりを掛けズガニや魚を捕る遊びは上級生から教わった。百合根を掘って砂糖醤油で煮て食べることは叔父に教わった。遊びが少ないから神社のお祭りには多くの人が集まったし、神社が古宮から今の地に越してきたこと（注1）も自然と知っていた。地域の歴史や文化は知ろうとしなくてもいつの間にか知っていたように思う。

今は時代が変わり、環境悪化で川では泳げず、護岸工事で近寄れない。親もうるさくなり、子供が自由に遊べない。地域外からの転入もあり、神社の移転の話を知らない人も増えた。昔は家族全員で食事を一緒にして情報交換をできた。今、子世帯は敷地内に別で家を建てているため、日常でふと孫に伝えたいことが思い浮かんでも伝えられない。」

3.2.2 Kさん（30代男性、山口県光市出身）

「就職に伴い裾野市に移住し14年になる。学生時代はボランティアや地域とのつながり等に否定的だったが、家庭をもち、会社だけのつながりだけで良いのかという思いを抱き消防団に入団した。入団前は「ただ住んでいるだけ」で市内に知り合いはいなかった。しかし入団をきっかけに知り合いが芽づる式に増え、徐々に活動の範囲が広がった。

裾野市は好きだが、裾野市の良いところ（場所）はどこかと問われても明確に答えられない。地域に愛着は抱いているが、それは住民の人柄や交流など地域社会に対してであり、歴史や文化に対する印象は低い。社会的つながりは自分の交流次第で変え得るが、歴史や文化については教えてもらわない限り分からないし、自身の子供に教えることもできない。」

3.2.3 Mさん（40代女性、長野県下諏訪町出身）

「結婚を機に裾野市に来て15年になる。地域に愛着を感じている要素としては人とのつながりが大きい。家族がおり、特に子供同士の関係性を考えると裾野を離れることは考えられない。愛着としては社会的な面が強く、歴史や文化はあまり考えたことがない。

下諏訪の歴史や文化には愛着を抱いている。夏に行われる大社の祭りは体に染みついており、今でもその時期には祭りを思い出す。裾野では9月に地域の祭りがあるが、夫や子供は楽しみにしているものの自身は忘れがちである。そういう意味ではアイデンティティは下諏訪にあるかもしれない。裾野から下諏訪に行けば帰ってきたと感じ、下諏訪から裾野に戻ればまた帰ってきたと感じる。学生時代に神奈川に4年間いたが、下諏訪や裾野に抱くような愛着は感じなかったのは人とのつながりが希薄だったからかもしれない。」

3.2.3 ヒアリングの総括

Sさんへのヒアリングから、想定と異なり、地域の歴史や文化を古いものとして伝承しなかったわけでは無いことが判明した。Sさんが地域の歴史や文化を次代に伝承できていないのは、環境の変化により昔と同じようにできないことが多くなったこと、社会の変化によ

り伝えたくても伝えられなくなったことが大きな理由だった。

Kさん、Mさんへのヒアリングからは、想定通り新住民の流入により伝承の断絶が起きていることが判明した。Kさんは人とのつながりから地域に対して前向きな想いを抱いているが、地域の歴史や文化を引き継いでいない、そしてこのままでは地域の歴史や文化を子供に伝えることができないと感じている。一方、Mさんはコミュニティの居心地の良さから愛着を感じているが、自身が裾野の歴史や文化を伝承する感覚は薄い。他方、ふるさとである下諏訪の歴史や文化には愛着を感じている。

ヒアリングより、地域に対して三者三様に愛着を抱いていることが分かった。また、地域の歴史や文化を伝えたいが伝えられていない人、引き継ぎたいが引き継いでいない人の存在も明らかになった。このミスマッチが解消できれば、地域の歴史や文化を知らなくなりつつある現状を改善できるのではないだろうか。

一方で、地域に対する愛着における歴史や文化の重要性が低い人もいる。歴史や文化への興味が無くとも地域への愛着をもって暮らすことはできるが、興味の有無に関わらず自然と地域の歴史や文化が身につけていることが理想的だと感じる。そのためにも上記のミスマッチを解消し、暮らしの中で歴史や文化が伝承されていくことが望ましい。

3.3 歴史や文化を伝えるための実践とその検証

住民が地域の歴史や文化を知らなくなりつつ現状を改善するためには、改めて伝えていく取組が必要である。ここでは筆者の地元である裾野市の東地区で主に小学生に向けて行った実践を紹介し、その際のアンケートから歴史や文化を改めて知ることが地域への愛着につながるか検証する。

3.3.1 裾野市立東小学校 埋蔵文化財出前授業（参加者 102 名）

6年生になると社会科の授業で歴史を学び始める。縄文時代から始まり、弥生時代・古墳時代と続くが、三内丸山遺跡、吉野ヶ里遺跡など代表的な遺跡が紹介され、自分の暮らすまちに関する記載はない。しかし当市でも縄文時代、古墳時代などの遺跡が多く発見されており、東小学校から見える範囲にも遺跡がある。そこで、それらの遺跡から出土した土器に実際に触れさせ、地域の歴史を伝えるための授業を企画した。

授業では教科書の内容に沿い、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器を紹介した。また、市内や学区内にも遺跡があるが、自然条件により弥生時代の遺跡が少ないこと、それは当市オリジナルの歴史であることなどを説明した。その後、縄文土器、須恵器、土師器の実物をグループごとに観察した。土器は学区内で発掘されたものを中心に選定した。

写真 1 出前授業の様子



（大塚智美氏提供、一部加工）

3.3.2 東地区育成会主催 今⇄昔ウォークラリー（参加者 10 名）

現代のまちなに残る古いものを題材としたクイズに回答しながら地域を歩くという趣旨のウォークラリーである。コースは、多くの地域が江戸時代までに作られたという山下の指摘から、東地区の中でも茶畑という江戸時代の村の範囲に限定した。

導入では航空写真（H25、S58、S51、S36）、地形図（S7）、絵図（延宝 5・1677 年）で地域の姿を遡り、まちが過去から続くものであることを説明した。さらに遡り、自分たちの暮らす平地が富士山の溶岩流により谷間が埋められて形成されていることを説明した。

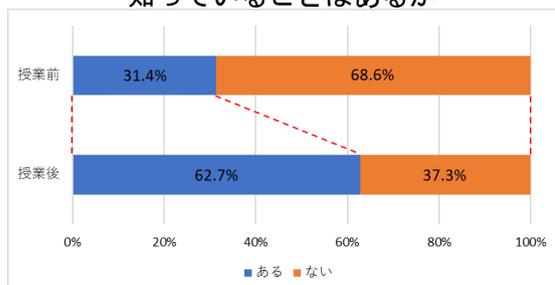
続いて 2 グループに分かれ、コースごとに設定されたクイズを解いて歩いた。2 つのコースを用意したが、クランクが二連続する特徴的な道だけ重複するコースとして設けた。クイズの内容は神社や屋敷跡、溶岩流の露頭などに関するものを用意し、ウォークラリー終了後にクイズの答えを発表・共有した。また、クランクが二連続する道が導入の絵図に描かれていることを紹介し、今のまちの原型が江戸時代には形作られていたことを説明した。

3.3.3 出前授業の検証

出前授業前後に同じ内容のアンケートを行い、意識の変化を確認した。

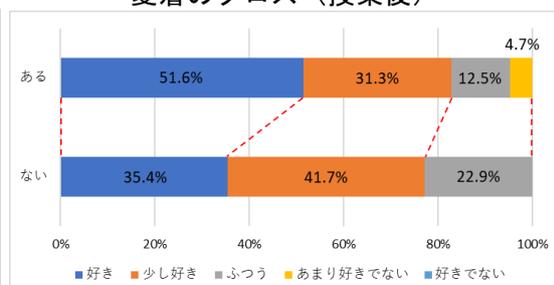
「地域の歴史や昔のことで知っていることはあるか」という質問に「ある」と回答した割合は、授業前 31.4%から授業後 62.7%に増加し、授業の目的を達成できたと言える（表 6）。上記の質問と「地域が好きか」という愛着を問う質問のクロス集計を見ると、知っていることがあると答えたグループの方が愛着をもっているという結果となっており、地域を知ることと地域への愛着には正の相関が見られる（表 7）。

表 6 地域の歴史・昔のことで
知っていることはあるか



児童へのアンケート調査より筆者作成

表 7 知っていることの有無と
愛着のクロス（授業後）

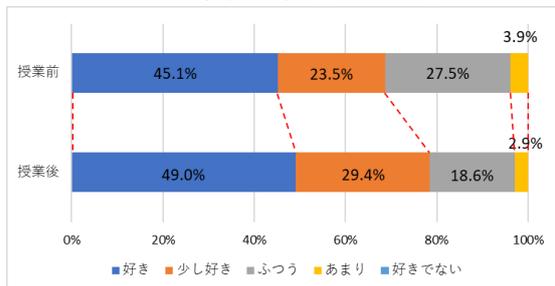


児童へのアンケート調査より筆者作成

そして、「地域が好きか」という質問については、授業前後で表 8 の通りポイントが上がった。この授業により地域の歴史を知った結果、地域への愛着が高まったと言える。

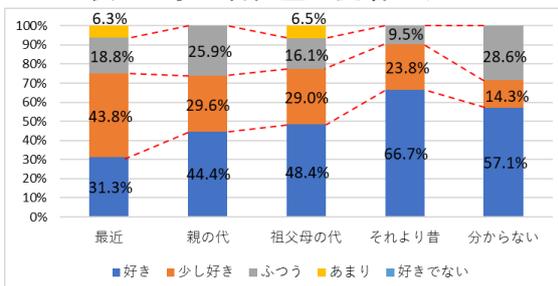
また、「いつから裾野に住んでいるか」という質問と地域への愛着を問う質問のクロス集計を見ると、家の居住歴が長いほど愛着が高いという結果が見られた（表 9）。転入などを除けば居住歴は全員 12 年である。この理由としては、古くから住んでいる家の子供ほど家族などから教わる地域の情報量が多いことが想定される。

表 8 裾野市や東地区は好きか



児童へのアンケート調査より筆者作成

表 9 家の居住歴と愛着のクロス



児童へのアンケート調査より筆者作成

授業後の感想では、学校のすぐそばに遺跡があり、土器が発掘されていることを驚く声が多く聞かれた。改めて地域を知る格好の事例になったと感じる。

3.3.4 ウォークラリーの検証

ウォークラリーでも実施前後にアンケートを行った。

「地域の歴史や昔のことで知っていることはあるか」という質問に「ある」と回答した割合は 20%から 60%に増加し、「地域を自慢できるか」という質問に「できる」と回答した割合は 10%から 50%に増加した。「地域が好きか」という質問については、事前から「好き」との回答が 70%と高く、事後は 80%に増加した。自由記述欄では「昔のことが知れて嬉しかった」「大体知っている所だったけど昔のことは知らなくて、よく分かってよかった」「裾野市のことを知れたからよかった」などの感想が聞かれた。

参加者が少なく、低学年の児童が多かったことからアンケートの精度に疑問はあるが、イベントにより地域の歴史を伝えた結果、地域への愛着が高まったと言えるのではないかと。

余談ではあるが、ウォークラリーの途中、問題の答えを「グーグルで調べればいいんじゃない？」と言う子供がいた。しかし、ローカルな情報はネット上にはないことが多い。今回のイベントのような形で、足元の情報を直接子供達に伝える意義を感じた。ただし、地域の情報を探しやすい形に整えておくこともまた大事だと考える。

3.3.5 実践の総括

2つの実践で、子供たちが地域の歴史や文化を知るためのきっかけを作った。アンケート結果から、子供達の地域に対する愛着は高まったと言える。地域の歴史や文化を知る取組を続けることで、地域への自信・誇りをもった子供を育てることができると思う。

一方で、今回の取組には三つの課題がある。一つ目は「知る」とどまっていることである。知ったことを「説明できる」ようになることで学びはより深まる。得た知識を誰かに伝えるための要素が必要だと感じる。二つ目は地域が限定されていることである。地域を限定した取組は、その地域の歴史や文化を深掘りできる反面、他地域の子供にはなじみが薄い。それぞれの地域で取り組むことが理想である。三つめは地域からの学びが無かったことである。地元学、地域学の実践では、地域を歩き、地域の人に聞き、自分の目で見て感じる事が重要だとされている。Sさんのように、地域のことを伝えたい人に参加してもらうこと

で、さらに地域のことを深く知ることができるのではないだろうか。

4. まとめ

地域の歴史や文化は、そこに住む人のアイデンティティとも深く結びついている。アイデンティティが見えない状態、自分が地域にいる必然性が分からないままでは、地域へ自信や誇りをもつことは難しいだろう。地域への自信や誇りは誰かに与えられるものではなく、個人の心で育てるものである。そのためにも意識的に地域を知り、学ぶことが必要だ。

また、地域の歴史や文化とは、完成したものを受け取るだけでなく、今地域にいる人たちによって更新されていくものである。表 9 のとおり、現状では地域への愛着が家の居住歴に比例している。この差を埋めていくためにも、生まれ育ちや居住年数に関わらず、地域の人々が交流し、未来に向けて地域の歴史や文化を作り、伝承していくことが重要だ。

数年単位で成果の出る取組ではないが、長い時間をかけ地道に継続することで、地域への愛着が生まれ、地域で自信・誇りをもって暮らしていけるようになると考える。今の子供たちが大人になった時、「裾野っていいところいっぱいあるよね」と胸を張って言えるように、取組を継続していきたい。

5. 提言

本レポートの結びに「学び」と「伝承」のための提言を行う。提言は大きく二つあり、行政、教育、地域に対して行うものである。

5.1 全市的な地元学の導入

住民が地域の歴史や文化を知らなくなりつつある今、それを改めて学ぶために全市的な地元学の導入を提言する。

5.1.1 社会教育としての地元学

地元学は、地域社会の中で住民が自ら調べ学ぶ取組だが、市の施策として取り入れるにあたり、各地域の地元学が独り立ちするまでは行政がサポートを行う必要がある。その際、歴史・文化施策ではなく、社会教育施策として行うことが肝要だと考える。地元学は歴史学ではない。その地域の歴史や文化という共有の知、共通言語をインストールすることであり、それは地域の中にタテ・ヨコ・ナナメの関係があって可能になると考えるからだ。

具体的には地元学の実践者による講演会や学習会を行い、関心をもった住民と生涯学習課や専門家（文化財保護審議員等）が協力し、その人の住む地域の地元学をスタートする。地元学の成果は地域内で共有し、地域住民全員の知識としていく。地元学の定着に応じ行政の関与を減らし、最終的には地域の力で地元学が展開されることを目指す。

5.1.2 学校教育としての地元学

平成 29 年 3 月の社会教育法改正により、「地域学校協働活動」が法律に位置付けられた。地域学校協働活動とは、学校が地域住民等の参画を得て行うものであり『ふるさと』について地域住民から学び、自ら地域について調べたり発表したりする学習」や、「郷土の伝統・

文化芸能学習」などが例示されている。

そこで、小学校の高学年児童に対して授業として地元学を導入することを提案する。地域で行われる社会教育としての地元学と連携しながら地元を学び、通年で一つのテーマについて学習、取組の最後には報告を行う。発表会形式や壁新聞形式などで、得た知識を自分の言葉で説明できるようになることを目指す。

5.2 歴史や文化の伝承の場の用意

一方、学んだ内容を伝えていく場がなければ、学びは個人に留まってしまう。ヒアリングでは伝承のミスマッチも発覚した。そこで、暮らしの中で歴史や文化を伝承させる場づくりを提言する。その際注目したいのが、江戸期の旧村単位に必ず存在する神社である。神社は地域に住む人々の共有地であり、開かれた場所である。また、地域の寺社への接触が地域愛着の醸成を助長する可能性も指摘されている（鈴木ほか 2008）。そこを地域の歴史や文化を伝承するための場として捉え直すことができるのではないか。

具体策は様々考えられるが、ここでは地域の子供向けに定期的な遊び塾を開催することを提案する。月一回、隔週などで季節の遊びを行う。神社にはもともと自然が多いため、昆虫採集や植物を使った遊びも考えられる。そしてそれは、その地域に生息する生き物や植物から地域の文化を学ぶことにもなる。

地域内でSさんのような人を掘り起こし、多世代が交流できる場を用意することで、地域の歴史や文化の伝承する場としたい。

5.3 学びと伝承のリンク

歴史は蓄積され、文化は変化していく。そのため、上記の学びと伝承は両輪となって回転し続ける必要がある。自身の知る歴史や文化を次代に伝える。受け取った世代は、自分たちの学びを反映させ、さらに次の世代へ伝える。地域の人が、年齢や状況に応じて、受け手・伝え手の役割を変えながら引き継いでいく。そうなったとき、地域の歴史や文化の伝承は改めて循環し、子供達の胸には自信と誇りがあふれているのではないだろうか。

（注1）裾野市茶畑に鎮座する茶畑浅間神社は、安政の大地震とその後の大雨による地滑りによってかつての社地が押し流されたことで現在の位置に遷座した歴史をもつ。

参考文献

伊藤香織・紫牟田伸子監修「シビックプライド2 都市と市民のかかわりをデザインする」
宣伝会議 2015

引地博之・青木俊明「地域に対する愛着形成の心理過程の検討」景観・デザイン研究講演集
No.1 2005年12月

<https://www.jsce.or.jp/library/open/proc/maglist2/00897/2005/pdf/B41D.pdf>

吉本哲郎「地元学をはじめよう」岩波書店 2008（岩波ジュニア新書 609）

山下祐介「地域学をはじめよう」岩波書店 2020（岩波ジュニア新書 927）

山下祐介「地域学入門」筑摩書房 2021（ちくま新書 1602）

裾野市「平成 29 年度裾野市市民意識調査報告書」2017

裾野市「令和 2 年度裾野市市民意識調査報告書」2020

三島市「平成 30 年度三島市市民意識調査報告書」2018

長泉町「令和 2 年度長泉町住民意識調査報告書」2020

裾野市「裾野市人口ビジョン」2015

裾野市「裾野市教育に関するアンケート調査報告書」2014

裾野市「裾野市教育に関するアンケート調査報告書」2019

鈴木春奈・藤井聡「『地域風土』への移動途上接触が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」土木学会論文集 D 64 巻 2 号 2008

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscej/64/2/64_2_179/_pdf/-char/ja